◆強く生きること

中川根中２年
渥美美紀

「あんたなんか生まなきゃよかった」。

そう言われたことがありますか。もしも言われたら、どうしますか。

この本の主人公あすかは、親にそう言われます。そして私は思います。親とは何なのだろうと。親は、子が尊敬する人間の一人であると思います。親も、子はとても大事である存在だと思います。ですが、それが束縛となってあらわれたらどうでしょう。あすかの母親、静代は、あすかや直人に心理的虐待を繰り返していました。「直人くんは、パパとママの希望の星なんだからね。すごく期待しているのよ。」という静代の言葉にも、棘は含まれています。溢れる愛を注いでいるかのように見えますが、静代が意識しているのは、直人の存在よりも周囲から自分の子育てへの評価です。「そろそろ解放してほしいんだよ。ママのいい子から。」と、直人が静代の思いを振り切るのは、自立するために必要な選択だったと思います。

静代があすかに投げつける「生まなきゃよかった。」「消せるのは声だけ？姿も消してみたらどうなの。」という言葉は、毒のついた棘だと思います。子どもは、親の言いなりになるために生まれてきたのではありません。親の満足のために生まれてきたのではありません。存在を否定されたあすかは 深く傷つきました。その傷がどれほど深いかは、声が出なくなってしまったことであらわされているのだと思います。「怒る時は思いっきり怒れ。悲しい時は思いっきり泣け。じいちゃんが受け止めよう。」という祖父の深い愛に包まれ、あすかは自分への自信を持ち始めていったのだと思います。

ある日、小学校のころの静代の日記を見つけたあすかは、静代の心の痛みを知ります。静代もまた、存在を忘れられた子どもだったのです。あすかを見守る優しい祖父母でしたが、早世した長女春野の看病に気を取られ、静代の思いを汲み取ることができませんでした。家族の誕生の木がある庭にも、静代の木はありませんでした。祖母の思い出話に登場するのは春野ばかりで、静代の存在は薄いものでした。あすかは静代の痛みを自分のことのように受け止めました。誰にでも弱さがあり、過ちを犯す可能性も持っているのだということをあすかは知ります。

「人は変われる。そのために学ぶのだ。」と、あすかは言います。その言葉に触発され、直人は自分の道を歩き始めます。静代の固くて狭い価値観は、新しい世界に飛び出した子どもたちと上司によって粉砕されていきます。人と人と関わって、いくつもの殻を破り大きく成長していくのだと思います。互いの存在を生かし合って、豊かな社会にしていければどんなにいいことでしょう。忘れてはならないのは、すべての命が恵みであることだと思います。私たちの命もまた、尊い恵みなのです。

あすかは、私に強く生きることを教えてくれました。初めは暗かったあすかも、兄や先生、祖父母や友だちに出会えたことで、だんだん明るくなっていきました。そしてその中で、あすかは強く生きることや命の尊さを伝えることができました。これはあすかにとっても、友だちにとっても、心に残ったことだと思います。あすかの言動は、人々に様々な影響を与えてきました。転校先の学校で起こっていたとても酷いいじめに反発し、抗議をしてクラスを一つにしました。そして、あすかを邪険にしていた静代にも、自分の思いをぶつけました。あすかは本当に強い子だと思います。自分の思いをしっかりと持っているあすかは、すごいと思います。

「私はここにいるよ。忘れないで…。」と、心の声でささやく子どもたちの存在を大切にしていってほしいものです。

◆不都合な真実

中川根中３年
森下崇弘

みなさんは、「環境問題」というテーマについて、どのようなことを思い浮かべるでしょうか。日本では最近、暖冬や大型の台風の発生といった異常気象が後を絶ちません。しかも、これは日本だけのことではありません。今世界中で、同じ、いやそれ以上に大変なことが起こっていました。この事実を知ったきっかけは 元アメリカ副大統領の著した本、『不都合な真実』を読んだことです。

では、アルが言う「不都合な真実」とは何なのか考えました。まずは、「真実」についてです。これは、今大きな話題になっている、地球温暖化が大きなキーワードになります。２００４年の８月、アメリカでハリケーン・カトリーナが発生したことを覚えていますか。このハリケーンによって、十数人もの命と何十億ドルの損害をもたらす結果となってしまいました。また日本では、同じ年に観測史上初と言われる10個の台風が日本に上陸しました。これらのハリケーンや台風は、温かい海水を吸い込むことで強力なものになります。すなわち、地球温暖化が進むと海水の気温が上がり、これまで以上の猛烈なハリケーン、台風が襲ってくるというのです。僕たちはもう、地球温暖化の影響にさらされているのです。地球温暖化がもたらす影響は、これだけではありません。氷河の消滅による海面の上昇など、さまざまな問題を抱えています。僕たちは必ずその影響を受ける日が来るでしょう。僕は、地球温暖化をなんとしても食い止めなくてはいけないと実感しました。これら地球温暖化の影響は、幻想ではありません。まぎれもない「真実」なのです。

では、なぜなかなか地球温暖化を止められないのか、地球温暖化の「不都合」とは何なのか、考えようと思います。僕たち人類は、便利さを求めてさまざまな物を発明してきました。特に、自動車、プラスチック製品は僕たちの生活を大きく変え、今ではどの家庭にもあると思います。しかし、生活の便利さを求めすぎた結果、僕たちは地球に悪影響をおよぼしているのです。自動車の燃料やプラスチック製品の原料は石油からできているので、僕たちがそれらを買うことで資源を使い、最終的には燃やされ二酸化炭素となっていきます。だからといって、これらの製品を作らなくなると、僕たちの生活はとても不便なものになってしまいます。便利を求めると地球温暖化につながる。地球温暖化を止めようとすると生活が不便になる。これこそが「不都合」であり、なかなか地球温暖化を止められない原因なのです。

僕もプラスチック製品をよく買い、これらの物はとても役に立っています。安くて便利なこれらの物が無くなってしまうのはとても嫌です。どうすれば今の生活を維持したまま地球温暖化をストップできるのか。僕は、まず地球温暖化の事実についてよく知ってほしいと思います。たくさんの人が地球温暖化について興味を持つことで、少しずつ自分たちの生活に変化が現れてくると思います。電気をこまめに消す。長く使える物を買う。リサイクルを心がけ、ごみをできるだけ少なくするなど、できることはとてもたくさんあるはずです。一人一人が行うことで、地球温暖化ストップの大きな力になるはずだと思います。

アル・ゴアは、この本の最後に次のような言葉を残しています。

「将来を守るため、私たちはもう一度立ち上がらねばならない。」

今、地球上で地球温暖化がとても深刻な問題となっています。この「真実」からは逃れられません。明日からでもいいです。できることを少しずつやっていきましょう。一人一人が力を合わせることで大きな力となります。そして、この「不都合な真実」がない社会を創っていけたらいいと思います。